

サンプル論文で学ぶ論文作成の技法 —「研究のための日本語スキル」授業報告—

佐藤 勢紀子

要旨

外国人留学生を対象とした日本語による論文作成のスキル向上を目指す授業において、受講者自身の専門分野の「サンプル論文」を利用したライティング・スキルの育成を行った。サンプル論文の使い方としては、共同利用と個別利用がある。共同利用の方法として、(1)論文についての学習→共通サンプル論文の分析による確認、(2)共通サンプル論文の分析→論文についての学習、(3)論文についての学習→共通サンプル論文を利用した作文、という3通りの方法、個別利用の方法として、(4)論文についての学習→個別サンプル論文の分析による確認、(5)個別サンプル論文の分析→論文についての学習、(6)論文についての学習→個別サンプル論文を利用した作文、という3通りの方法が考えられ、計6通りの方法を組み合わせて練習や課題を行った。受講者の授業評価から、特に個別サンプル論文を用いた学習項目の評価が高いことがわかった。

キーワード

論文作成、サンプル論文、共同利用、個別利用

1. はじめに

本稿は、東北大学大学院国際文化研究科で開設されている研究科共通関連科目「研究のための日本語スキル」の実践報告である。この授業は外国人留学生の論文作成および口頭発表のスキル向上を目指すものであるが、本稿ではそのうち論文作成に関する部分を取りあげ、「サンプル論文」を利用したライティング・スキルの育成を中心に記述する。

論文作成指導における「サンプル論文」の利用については、筆者が2006年度に実施した同科目の授業についての報告で既に論及している⁽¹⁾。そこでは、様々な分野の留学生が共存するクラスにおいて受講者の専門分野の学術的文章の特徴に即応したライティング・スキルを養うためには、受講者各自の専門分野のサンプル論文を用いることが効果的であることを指摘した。しかし、授業開設初年度の2006年度においてはサンプル論文の利用がいまだ試行段階にあったこと、および、当該報告の中心課題が受講者の専門分野の多様性への対応にあったことから、サンプル論文の利用について、十分な検討と論述を行うことができなかった。そこで、本稿では、その後の実践、とりわけ2008年度の同科目の授業内容にもとづき、サンプル論文を用いた学習方法に焦点を絞って報告することとしたい。

2. 授業の概要

2. 1 科目開設の経緯

国際文化研究科の研究科共通関連科目「研究のための日本語スキル」は、上記のとおり2006年度に新設された授業科目である。これまで年に1回の割で開講され、本稿で報告する2008年度の授業は3回目の開講ということになる。

国際文化研究科は教養部改組にともなって1993年4月に発足した文・理融合型の独立研究科であり、現在3専攻16講座を擁している。本研究科では、創設以来、外国語による研究のスキルの養成が重要な課題となっていた。とりわけ、学生の3分の1以上を占める⁽²⁾外国人留学生の大半は、口頭発表や論文作成を彼らにとっての外国語である日本語で行わなければならない、そのための特別な訓練が必要とされていた。「研究のための日本語スキル」は、そのような要請に応えるものとして、日本人学生を主対象とする「研究のための英語スキル」とともに開設されたものである。留学生を対象とすることから、初年度以来、日本語教育を専門とする筆者が授業を担当してきた。

なお、この授業は、全学の留学生・外国人研究者のための日本語教育プログラム「東北大学外国人留学生等特別課程」の上級前期日本語応用の授業(=Practice 5, 略称「P5」)と合同授業の形をとっている。以下、このP5をも含めた形で、授業実践の報告を行う。

2. 2 シラバス

2. 2. 1 学習目標

この授業の論文作成に関する学習の到達目標は、「日本語で3ページ程度の論文が書けるようになること」⁽³⁾である。しかし、受講者の主体は修士課程一年次学生であって「論文」を書く段階に至っていないため、論文の書き方をふまえてきちんとした「研究計画書」が書けるようになればよいものとした。

2. 2. 2 授業の内容

論文作成に関しては、日本語の書き言葉の特徴、論文の条件、論文の構成、論文の各部分の構成要素・展開パターン・文型・表現、引用の仕方、注／文献の書き方、要約の仕方を主な学習項目としてとりあげた。具体的な学習の仕方については、第3節で解説する。

2. 2. 3 教材

教科書として、筆者が執筆を担当した、アカデミック・ジャパニーズ研究会『大学・大学院留学生の日本語④論文作成編』(アルク, 2002, 以下『留学生の日本語④』)を用い、補助教材として、第3節で詳しく紹介する「サンプル論文」を使用した。『留学生の日本語④』は、多様な専門分野の留学生を対象として、各分野にほぼ共通する学習項目、すなわち、基本的な論文の構成要素とその組み合わせによる論述の展開パターン、および、各構成要素を表すのに用いられる典型的な文型・表現を指導できるように作られた教科書であり⁽⁴⁾、授業の中で、基本的な学習項目を提示する際に使用した。また、筆者が参加している研究グループで現在開発中の教材⁽⁵⁾の一部も参考資料として配布した。

2. 3 受講者

2008年度授業の登録者は26名で、うち22名が授業終了時まで継続的に受講した。22名のうち、国際文化研究科の共通科目の登録者は12名、P5の登録者は10名であった。受講者の所属部局と専攻分野を表1に示す。

表1 受講者の所属部局および専攻分野

所属部局	専攻分野	受講者数
国際文化研究科	アジア文化論	2 (1)
	言語コミュニケーション論	2 (0)
	国際資源政策論	2 (0)
	科学技術交流論	1 (0)
	言語文化交流論	4 (1)
	異文化間交流論	2 (0)
	多元言語文化社会論	1 (0)
文学研究科	日本思想史学	1 (1)
教育情報学教育部	IT教育アーキテクチャー	1 (1)
歯学研究科	口腔システム補綴学	1 (1)
工学研究科	技術社会システム	1 (1)
	エネルギー材料長期信頼性研究	1 (1)
情報科学研究科	システム情報数学	1 (1)
東北アジア研究センター	モンゴル・中央アジア研究	1 (1)
宮城教育大学	国語教育	1 (1)
計		22 (10)

(括弧内はP 5の受講者数)

表からわかるように、受講者の専門分野は人文科学を中心に多岐にわたっている。受講者の身分は、修士課程1年生が13名、2年生が2名、研究生が6名、客員研究員が1名であった。また、受講者の母語は、中国語12名、韓国語3名、ドイツ語2名、マレー語、モンゴル語、ウイグル語、ポーランド語、スペイン語が各1名であった。

2. 4 授業日程

授業日程を表2に示す。ガイダンスは研究科共通科目とP 5で分けて行った。3回目以降の授業のうち4回を研究(計画)発表会に当てた。それ以外の9回においては、毎回論文作成に関する学習を行い、授業中に行う練習問題のほかに、課題を出して提出を義務づけた。また、授業期間中、2回のアンケート調査を行った。ガイダンスの際に実施した調査 [1] では、所属や研究テーマ、学習歴を含む受講者の情報を問うとともに、学習項目や授業の方法についての要望の記述を求めた。最終回に実施した調査 [2] では、様々な角度から、授業に対する評価と提言を求めた。調査 [2] の回答の一部を第4節で紹介する。

3. サンプル論文を用いた学習

3. 1 サンプル論文使用の理由

サンプル論文は、各受講者が1編ずつ専門分野の論文を持ち寄り、論文の条件や構成、

表2 授業日程

回	月日	内 容	練習／課題	課題番号
(1)	4/8	ガイダンスおよび面接	調査票 [1] 記入	
(2)	4/15	ガイダンスおよび面接	調査票 [1] 記入	
(3)	4/22	書き言葉の特徴	書き言葉の練習 サンプル論文探し (～5/8)	課題 1
(4)	5/13	論文の条件・論文の構成	論文の構成のチェック	課題 2
(5)	5/20	序論の書き方	序論の書き方の練習	課題 3
(6)	5/27	本論の書き方 (1)―方法 発表の仕方	方法の書き方の練習 研究計画発表レジュメ作成	課題 4
(7)	6/3	研究計画発表会	発表の評価	
(8)	6/10	研究計画発表会	発表の評価	
(9)	6/17	本論の書き方 (2)―結果	結果の書き方の練習	課題 5
(10)	6/24	本論の書き方 (3)―考察	考察の書き方の練習	課題 6
(11)	7/1	結論の書き方	結論の書き方の練習 発表会／ゼミについての報告	課題 7
(12)	7/8	注・文献の書き方	注・文献の書き方の練習	課題 8
(13)	7/15	要約の仕方 討論の仕方	要旨の作成 研究 (計画) 発表レジュメ作成	課題 9
(14)	7/22	研究発表会	発表の評価	
(15)	7/29	研究発表会	発表の評価 調査票 [2] 記入	

() は論文作成に関する項目)

論文の各部分の書き方を学ぶ上で参考にするものである。このような補助教材を用いることとした理由としては、1) 教科書に出ている構成要素を表す典型的文型・表現や、構成要素の展開パターンが受講者自身の専門分野の論文で実際に用いられていることを確認することによって、受講者の学習意欲が高まると考えられること、2) 教科書の記載とは異なる、それぞれの専門分野に特徴的な文型・表現や展開パターンが存在する場合、授業担当者がそのことを認識して指導に当たるとともに、受講者各自が十分にそれらの特色を理解して論文作成に臨むことが必要であること、の2点があげられる。

3. 2 サンプル論文の選定

サンプル論文の選定は、科目が初めて開設された 2006 年度には、受講者に自分の研究テーマに関連する論文のコピーを持って来るよう指示して行った。その結果、集まった「論文」は研究発表要旨、レビュー、研究ノート等を含む雑多な形態のものになった。

この経験から、翌 2007 年度の授業では、あらかじめ Eメールで受講者の指導教員と連

絡をとり、サンプル論文として原著論文を受講者に推薦することを依頼した。この方法により、サンプル論文の「論文」としての平均的な質は向上したが、受講者からは、指導教員の推薦を受けるのではなく自分自身でサンプル論文を選びたいという要望も寄せられた。

そこで、2008年度の授業では、受講者がより主体的にサンプル論文を選定できるように、指導教員の協力の要不要は受講者の判断に任せることとした。すなわち、ガイダンスでサンプル論文を用いることを予告し、3回目の授業で「自分の専門分野で定評のある学会誌に掲載された原著論文」というサンプル論文の条件⁽⁶⁾を受講者に明示した上で指導教員への推薦依頼文を渡し、必要に応じて指導教員の協力を求めるよう指示した。

上記の方法により、2008年度の授業では、22編のサンプル論文が集まった。サンプル論文は、前述のように学会誌掲載の原著論文であることが望ましいが、今回も、学会誌論文は全体の3分の1程度にすぎず、大学等研究機関の紀要、商業雑誌、論文集などに掲載された論文が多く見受けられた⁽⁷⁾。しかし、初年度のように論文のジャンルから外れたものがなかったのは、サンプル論文の条件を明示した成果であると思われる。

3.3 サンプル論文の利用

サンプル論文の使い方としては、大きく二つの方法が考えられる。一つは、いくつかのサンプル論文を選び、クラス共通の教材として用いる方法（共同利用）である。この使い方では、過去の年度の授業で提出されたサンプル論文も含めて利用することができる。もう一つは、各受講者が自分で選んだサンプル論文を教材として学習する方法（個別利用）である。以下、これら二つの方法によるサンプル論文の利用例を具体的に紹介する。

3.3.1 共同利用

論文作成を中心に行った9回の授業のうち、初回を除く8回の授業において、サンプル論文を利用した⁽⁸⁾。そのすべての回で、共同利用の形で共通のサンプル論文を使っている。ここでは、その利用の仕方として3通りの利用方法とその例を紹介する。

【利用方法1】 論文についての学習 ⇒ 共通サンプル論文の分析による確認

(9)「本論の書き方(2)―結果」の授業における利用例を紹介する。まず、教科書に即して、本論の研究結果を記述する部分の構成要素、構成要素の展開パターン、文型・表現を提示した。ここでは、紙幅の関係で、構成要素と展開パターンのみを示す。なお、以下の構成要素に付いているアルファベット記号は、教科書で用いている記号である。

構成要素		
l. 図表の提示	{	m ₁ . 数値の大きさの表示
m. 図表のデータの説明		m ₂ . 数値の大きさの評価
n. 判明事項の指摘		m ₃ . 変化の形容
		m ₄ . 変化の進行の指摘
		m ₅ . 対比
		m ₆ . 比較
展開パターン		

- [10] 1 ⇒ m
 [11] 1 ⇒ n
 [12] 1 ⇒ m ⇒ (これより,) n
 [13] n ⇒ m

続いて、文型・表現の練習を行った上で、次の課題を出した。

【課題5】⁽⁹⁾ A-Fは本論の後半の研究結果(および考察)を述べた部分です。A-Fの中から二つを選び、1-nの構成要素を表す文型・表現に下線を引き、記号を付けなさい。

A-Fは、6編のサンプル論文から抜粋した研究結果を表す記述である。ここでは、そのうち、F⁽¹⁰⁾をとりあげ、課題に対する解答を示す。なお、この課題では展開パターンについては問わなかったが、この文章の展開パターンを示せば、上記の[10]となる。

F 表4に「卒業後の進路(就職先・進学先)を決定するとき、重要視すること」についての調査結果を示す。専門学校生では「人間関係」を重視するとの回答が71%、短期大学生は「給与」が69%で両群で最も多い_{m6}結果となった。専門学校生では、次いで_{m6}「仕事内容」と「就業時間」が65%、短期大学生は、「仕事内容」が64%であった。また「休日」を重要視する専門学校生が61%に対し_{m5}、短期大学生では37%であった。

【利用方法2】 共通サンプル論文の分析 ⇒ 論文についての学習

初めから学習項目を提示するのではなく、複数の共通サンプル論文の分析を通じて、帰納的に論文の構成要素、展開パターン等を見出すという学び方もある。今回この方法を採用したのは、(13)「要約の仕方」の論文要旨の書き方の学習においてである。最初に一般的な要約の技法の学習を行い、論文要旨の構成要素は既習の論文の構成要素のうちのどれにあたるかについて意見を出し合った後、下記の練習でサンプル論文を用いた分析を行った。六つの要旨のうち、C⁽¹¹⁾をとりあげ、構成要素を表す記号を付けて解答例を示す。

【練習】問2 次のA-Fの論文要旨を読み、論文要旨の構成要素と展開パターンを考えなさい。(ヒント：論文のどの部分に似ているか、考えてみましょう。)

C 接続助詞は本来、節と節をつなぎその関係を表すという機能を持つが、談話場面においては、そのような機能を持つはずの接続助詞を伴わない形で用いられることも多い。本稿においてはそのような接続助詞による言いさし表現のうち「ケド」で終止するものについて、それを「談話」という単位の中でとらえることによって、この表現形式が従来指摘されてきた「やわらげ」などといった表現効果に関わる機能の他に談話展開に関する

} a
} g₂

る機能を持つという、言いさしという表現形式について、これまでの研究では言及されることのなかった新しい側面を示した。

本稿で明らかにしたのは次の2点である。まず1点目はケドによる言いさしはトピックの展開に関して、提示された発話内容がその後のトピックとなることを明示する機能を持つということである。そして2点目は turn-taking に関して、ケドによる言いさしは従来指摘されるように turn を譲渡するだけでなく、その後の談話の進め方を完全に相手に委ねてしまうことを示す機能を持つということである。

引用文の右側に記したアルファベット記号は、教科書『留学生の日本語④』で用いている構成要素を表す記号である。a は「研究テーマの説明」、g₂ は「研究行動の確認」、x は「結論の提示」を表し、a は序論、g₂ と x は結論の部分によく見られる構成要素である。このように、論文要旨が、論文の本体、特に序論と結論の中に出てくる構成要素の組み合わせによって書かれていることへの気づきを促すことが、この練習のねらいである。

【利用方法3】 論文についての学習 ⇒ 共通サンプル論文を利用した作文

論文の書き方を学習した後、共通サンプル論文を用いて作文練習をすることもできる。たとえば、(13)「要約の仕方」の授業では、上記の練習で論文要旨の構成要素を学んだ後、さらに別のサンプル論文の序論と結論を用いて論文要旨を書くという課題を出した。この課題で個別サンプル論文を用いなかったのは、サンプル論文の中には既に要旨が付いているものもあるためである。

【課題9】 別紙のAからCの論文のうち一つを選び、その序論と結論を参考にして、学習した 展開パターンを用いて要旨 (Aは200字、B・Cは300字程度) を書きなさい。

3. 3. 2 個別利用

前項では、サンプル論文の共同利用の方法と例を示した。共同利用には、共通サンプル論文についてクラスで意見交換をしながら学習できる、サンプル論文の数が限られているため授業担当者が対応しやすい、などのメリットがある。しかし、その一方で、共同利用の場合、大半の受講者は自分の用意したサンプル論文を使うことができず、分野の比較的近いサンプル論文を選んで学習することになる。共通サンプル論文による学習を行った上で個別サンプル論文を用いた学習ができれば理想的だが、限られた授業時間の中でそうした機会を頻繁に設けることは難しかった。ここでは、課題として受講者に課したサンプル論文の個別利用を中心に、その方法と具体的な例を紹介する。

【利用方法4】 論文についての学習 ⇒ 個別サンプル論文の分析による確認

この方法は、(4)「論文の条件・論文の構成」の授業で採用した。論文の構成について、教科書例文集の出典論文 45 編の構成を参照しつつ学習した後、各自のサンプル論文の構

成を分析するという課題を出した。課題および論文の構成の解答例を示す。

【課題2】問1 サンプル論文の情報を示した上で、例文集出典論文の構成にならってサンプル論文の構成を書きなさい。例文集出典論文の何番の論文に近いですか。

(解答例) 1. はじめに / 2. 方法 / 3. 結果と考察 / 4. 最後に / 注 / 参考文献 / 付録

また、(11)「結論の書き方」の授業においても、教科書を使った学習、共通サンプル論文の分析による確認の後、練習として各自のサンプル論文の分析を課した。

【練習】問2 サンプル論文の結論を読み、結論の構成要素を表す文型・表現があれば書き出しなさい。また、展開パターンは何番（に近い）ですか。

【利用方法5】 個別サンプル論文の分析 ⇒ 論文についての学習

共同利用の〔利用方法2〕と同様に、まず個別サンプル論文を分析して、そこから論文の書き方を学ぶという方法もある。上の【課題2】問1に続く問2はその一例である。

【課題2】問2 サンプル論文の序論・本論・結論の分量をおよその比率で示しなさい。

このように、まず受講者各自のサンプル論文の序論・本論・結論の比率を報告してもらい、その情報を共有することで、三つの部分の比率にはおのずから適正な範囲があり、それを意識して論文を書くべきであることへの注意を促すことができる。

また、(12)「注・文献の書き方」においても、実際に注・文献の書き方に入る前に、注と文献の違いや使い分け、注と文献を両方書く場合どちらを先にするか、などの点について、各自のサンプル論文でどうなっているかを検討、クラスで報告し合い、そこから学んでいくという方法をとった。

【利用方法6】 論文についての学習 ⇒ 個別サンプル論文を利用した作文

共通サンプル論文のみならず個別サンプル論文も、使い方によっては作文の好適な材料になりうる。今回の授業では、〔利用方法3〕で紹介した(13)「要約の仕方」の課題において、自分で選んだサンプル論文の要旨を書くという選択肢も用意した。論文要旨を書く練習として専門分野のサンプル論文が使えれば、大きな学習効果が得られると考えられる。

4. 授業の成果

4. 1 課題およびレポートの提出状況

課題の提出率は平均 85.9%（共通科目受講者では 90.7%）ときわめて高かった。また、すべての受講者が発表レジュメを書き、学期末には、P5受講者の2名を除く 20 名が、

発表レジュメをもとにまとめたA4判3枚の論文もしくは研究計画書を提出した。サンプル論文の利用をこれまで以上に徹底したことにより、学習者のモチベーションが向上し、面倒な課題にも積極的に取り組むようになった結果、課題やレポートの提出率が高まったのではないかと考えられる。

4. 2 受講者による授業評価

授業の最後にアンケート調査 [2]を実施し、全員の回答を得た。論文作成について特に学ぶことができた学習項目は、回答者の多い順にあげれば、「書き言葉の特徴」(16名)、「論文の構成」(15名)、「注・文献の書き方」(7名)、「要約の仕方」(6名)となっている。また、どの練習/課題が特に役に立ったかについては、課題9(要約の仕方)が8名、課題1(書き言葉の特徴)と課題6(本論の書き方(3)―考察)が各7名、課題8(注・文献の書き方)が6名で比較的回答者が多かった。「書き言葉の特徴」は別として、「論文の構成」、「注・文献の書き方」、「要約の仕方」など、個別サンプル論文を用いた学習項目において評価が高いことが注目される。

また、同調査において、サンプル論文を使った練習についてのコメントを求めた。18名から回答があり、そのすべてがサンプル論文の利用についてのプラス評価を表したものであった。「役に立った」「有効だった」など比較的簡単なコメントは除き、評価内容が具体的に記されたものを、漢字の誤りのみ修正して記載する。

- a. 自分の研究と関係がある論文を参考にして、先行研究の書き方に注意して練習する方法はいいと思います。
- b. 自分の研究に関する論文を使い、練習するのがすぐ手につくし、理解しやすいと思います。
- c. サンプル論文を使った練習は自分の分野の研究テーマなので練習は役に立ちます。
- d. 自分が研究している部分と関連性をたくさん持っているのもっと理解しやすい練習になったと思います。
- e. 実際に自分の専門分野の論文を作[使?]ってとても面白かったです。
- f. 関連分野の論文を見て、どのように構成されているかを考え、授業の内容の理解に非常に役にたったと思います。
- g. いろんなサンプル論文があって、また書き方も違って、いい勉強になると思います。サンプル論文を使って、構成と書き方もっとわかりやすくなりました。
- h. とてもよかったです。サンプル論文を分析することで、論文構成や書き言葉の特徴への理解が深まり、大変助かりました。
- i. 今までサンプル論文の内容をよく研究していたけど文章、書方について細かく調べて、自分の論文を書くときに、役に立つじゃないかなと思いました。
- j. サンプル論文の結論のパターンを分析したり、論文の要旨の仕方を考察したり、文献の内容を考えたりすることで、自分の研究テーマの発表レジュメの書き方を学び、今後の方向について予想が立てたと思います。
- k. 論文の構成を考えながら読むのは、論文の内容を深く理解できる。将来、こんな方法を使って、先行研究を読むつもりである。

上記のように、サンプル論文利用を評価するコメントの内容としては、自分の研究との関連性への言及 (a-f)、論文の形式や構成の理解への言及 (f-k)、自分の今後の研究活動への言及 (i-k) が目立った。

サンプル論文を使った練習を増やした方がいいという意見も、次のように、2名の回答者から寄せられた。

1. サンプル論文を使った練習をもう少し増やした方がいいと思います。
- m. サンプル論文を使った練習 → もう少し増した方がいいのではないかなと思います。やはり、自分の分野の論文からは最も学ぶことができます。

今回、過去の年度のものも含め、サンプル論文の共同利用は頻繁に行ったが、個別利用の機会は少なかったため、このような要望が出たのではないかと考えられる。

5. おわりに

以上、論文作成の補助教材としてのサンプル論文の利用を中心に、共通科目「研究のための日本語スキル」の授業内容および受講者の授業評価について報告した。分野共通の教科書と併せて受講者自身の専門分野のサンプル論文を様々な形で用いることによって、受講者のモチベーションが高まるとともに、各分野のライティングの方式により即応した学習が可能になり、学習効果が上がると考えられる。

受講者の評価が特に高いと見られるサンプル論文の個別利用の仕方について、さらに検討を加え、授業に取り入れて行くことが当面の課題である。そして、このようなサンプル論文を利用した論文作成指導を日本語教育の現場で広めていくためには、受講者がサンプル論文を適切に選ぶための指導上の工夫を重ねること、および、日本語教員が選定されたサンプル論文の構成要素や展開パターンを分析・把握する上で参考にすることができるように、専門分野や研究手法による論文の書き方の違いにより細かく配慮した教材を開発することが求められる。また、サンプル論文を用いた論文作成の技法の学習は留学生のみならず日本人学生にも有効かつ必要であると考えられ、今後は日本人学生の論文作成スキル養成をも視野に入れた教授法の開発を進めていきたい。

(佐藤 勢紀子 さとう せきこ・東北大学・sekiko@intcul.tohoku.ac.jp)

注

1. 佐藤勢紀子 (2006) 「多様な専門分野のサンプル論文を用いたアカデミック・ライティングの指導法」『専門日本語教育研究』第8号, pp.39-44
2. 2008年5月現在、在籍学生は212名で、うち89名(37.3%)が留学生である。
3. 東北大学大学院国際文化研究科 (2008) 『平成20年度授業概要(シラバス)』 p.153
4. 論文の各部分の構成要素と展開パターンを示した本編、33の構成要素ごとに典型的な文型・表現を提示した文型・表現集、45編の論文から例文を抽出した例文集、の三部構成になっている。
5. 二通信子・大島弥生・因京子・佐藤勢紀子・山本富美子 (2008) 「論じる行為への理解を進める論文・レポート作成支援表現集の開発」(『専門日本語教育研究』第10号)

を参照されたい。

6. 定評のある学会誌の原著論文であれば、その研究分野の論文の書式による執筆要領に従って書かれ、厳正な査読を経て掲載されているものと考えられることから、このような条件を定めた。
7. ただし、サンプル論文を適切に選んだかどうかは授業の成績評価とは関連づけていない。
8. 初回の(3)「書き言葉の特徴」の課題においては、『留学生の日本語④』の例文集を素材として書き換え練習を行っている。ただし、例文集の例文が各分野の45編の論文から抜粋されたものであることからすると、この練習も広い意味でのサンプル論文の利用であると言えよう。
9. 論文作成に関する課題に1から9までの通し番号を付けた。授業日程(表2)参照。
10. 2008年度のサンプル論文からの抜粋。市川基・尾崎順男・小泉順一・茂原宏美・柵木寿男・上野隆治・河野壽一・丸茂義二・西田紘一(2007)「短期大学への改組時の専門学校と短期大学の学生意識」『日本歯科医学教育学会雑誌』第23巻第3号、pp.373-380
11. 2008年度のサンプル論文からの抜粋。永田良太(2001)「接続助詞ケドによる言いさし表現の談話展開機能」『社会言語科学』第3巻第2号、pp.17-26